

巻 頭 言

村 上 和 夫

立教大学 観光学部 学部長

本立教大学観光学部紀要第14号は、岩田修二先生のご退職記念号です。

岩田先生は、社会科学を研究基盤とする教員の多い観光学部の中で、稀な、自然地理学を専門とする自然科学の研究者です。ご縁があり、2006年に首都大学東京よりお迎えいたしました。先生のご専門の分野は氷河地形学で、傑出したご業績と指導力により日本地理学会の理事長をつとめられた日本を代表する研究者でありすぐれた指導力をお持ちの教育者です。

ご在任期間は、他の教員にくらべ長くはありませんでしたが、学生を引率して山岳地域で行われる学部の演習合宿、大学院における研究の指導など、先生が教育を通じて学生に教示された研究への姿勢に強い影響をうけた学生は多くあります。先生のご提案とご尽力で作成された『観光学リーディングス - 分野と方法』は、大学院において研究をスタートする学生に、観光研究が持つ学際研究として領域の広さを見渡すための本研究科独自の教材となっています。

まだまだお元気な岩田先生が学部を去られることは、とても残念なことです。先生を通じて学ばせて頂いた研究への姿勢を我々後に続く者が継承し、今後の学部の発展に努力することを茲に誓うものであります。岩田先生、どうかご自愛いただき、ますます研究をお進め頂きますようお願いを申し上げます。

さて、本年度は2011年3月11日に起きた東日本大震災の影響を大きく受けた年でもありました。たくさんの不幸な出来事がありました。どうか、主の深い慈しみのうちに、人びとを安らかに憩わせてください。このような中で幸いなことに、亡くなった学部ならびに大学院学生はひとりもおりませんでした。約1ヶ月間の休講を経て、5月の連休後から授業が再開されました。教員の努力により前期の授業は、計画どおり終了することができました。

観光は、当初インバウンドを中心に大きく落ち込みましたが、年末には徐々に回復してきました。しかし、私たちの先輩方の中には被災地で事業を営む方々も多く、いまだ復興が緒につかない地域もあります。ボランティア・ツーリズムが盛んとなり、観光学部からも多くの学生が参加しました。被災地の復興に資する観光事業を支援しつつ、観光学部も日本の観光の方向性を見据えた研究と教育を、学会ならびに他の機関と協力しつつ展開しなければなりません。

観光学部と観光学研究科は、2012年度より新しいカリキュラムを展開しますが、その基礎を固める2011年度は、立教大学の観光研究ならびに観光教育、さらに国際化にとって試練の多い年でした。同時にそれらは、新しい立ち位置と視点を確保する年であったと言えることができます。

